#吉岡進の新世代沖釣り紀行 vol.09

ツリガチ！

TSURI GACHI

★男には、ガチにならねばならないときがある。茨城県日立久慈漁港から一つテンヤマダイに挑んだヨッシーは、釣れればデカイ、でも釣れない可能性も高い、という「イチかバチかの宙の釣り」をほとんど貫いた。やり切るからこそ分かること。それは釣果以上の成果となって、ヨッシーに蓄積され、次の釣りへと結びついていくのだ。

茨城県日立沖の一つテンヤマダイ

文◉高橋 剛

ヨッシーが、ガチだった。釣りに対して常にガチのヨッシーではあるが、この日はとくにガチガチになっていた。

寒かったのである。前夜に雪の予報があったぐらい、関東地方は強い寒気に覆われていた。

1月26日、まだ暗い茨城県日立久慈漁港・大さん弘漁丸の船着き場に集まった我われツリガチ取材班は「それほど寒くねえな」「ヨユーヨユー」「これなら半袖短パンでもよかったな」などと、うそぶいていた。

だが、さえぎるものが何もない沖に出ると、さすがに寒風が身に染みる。いつも陽気で朗らかなツリガチ取材班も、さすがに口数が少なかった。

しかも右ミヨシに陣取ったヨッシーが風を避けるには、みんなに背を向ける格好になる。

沈黙。背を向けるヨッシー。冷たい北風。ガチな空気が弘漁丸に漂う。

……とは言いつつ、ヨッシーはプロアングラーである。寒さにガチガチ震えていたわけではない。いや寒がりのヨッシーのこと、多少は北風に負けていた感は否めないが、それ以上に内心は熱く燃えたぎっていた。

「ここんとこ、弘漁丸では1～2キロ級のマダイがボンボン上がってるんだ。おれの狙いは、ズバリそれ。今日は良型一本勝負だよ……」

5時に港を出て、まだ暗いうちの6時10分から釣りが開始された。水深30メートル前後のポイントは、基本的にフラットな底である。パラシュートアンカーを打ち、大きく流していく。

一つテンヤマダイ釣りの魅力は、エサ取りを含めてアタリが多いことだ。だが今日はなかなかアタリが出ない。

こだわるのは宙層か底付近か、面白さであり、難しさでもある。

「アハハ、釣れましたぁ！」

ニコニコとカサゴを掲げているのは、トモキだ。トモキは27歳。ツリガチ取材班で現在最年少を誇る彼は、クロダイの落とし込み釣り業界では知らない人がいない（と思われる）手練れである。

いつもニコニコと笑顔を浮かべる優しい青年で、最近はツリガチ準レギュラーとして様ざまな沖釣りに挑戦。

「ボク、初めてなんですぅ」なんてかわいいことを言いながら、持ち前の腕でバッタバッタと本命を釣り上げるのである。

とりあえず魚がエビを食ってきた、ということは朗報である。しかしトモキがもう1尾カサゴを追加したものの、どうにも続かない。ヨッシーも取材班に背を向けたまま「うーん……」とうなるばかりだ。

「明るくなってきてからが勝負かな……」

ヨッシーは宙層の釣りに徹していた。数日前に釣れた1～2キロ級のマダイは底から5メートルほど上で食ってきた、という情報を仕入れていたのである。

ここは、一つテンヤマダイの面白さであり、難しさでもある。

実際にやってみると分かるが、底付近はエサ取りやゲストも含

エビがそのまま上がってくるたびに、少しずつ心がダメージを負っていく。

▲船中1尾目はトモキが釣り上げたカサゴ